262 甲状腺腫瘤における^{201}Ｔ１ dynamic study とdynamic ＭＲＩの有用性の検討

井上正昭、大西卓也、藤井広一、熊野町子、浜田辰巳
石田　修（近大　放）竹田照夫、柴　芳浩（同　中放）

甲状腺腫瘤の良悪の鑑別において、^{201}Ｔ１ dynamic とdynamic ＭＲＩの有用性について比較検討を行った。

^{201}Ｔ１ dynamicとGd-DTPA を使用したdynamic ＭＲＩを施行し、手術が行なわれた14例を対象とした。内訳は、乳頭癌 2例 、濾胞癌 3例、濾胞腺腫 1例、腺腫様甲状腺腫 8例であった。 ^{201}Ｔ１はGd-DTPA と比較して甲状腺内に長く停滞する傾向にあるが、dynamic curve pattern は比較的相関を認めた。両者とも悪性は wash out が遅い傾向にあり、良性はuptakeを認めないか、又は認める場合wash outが早い傾向にあった。 dynamic study は甲状腺腫瘤の良悪の鑑別においてかなりの範囲可能で有用であると考えられた。

263 甲状腺腫にGa-67の異常集積を示した興味ある2例

宮本信一，笠木寛治，御前　隆，竹内　亮，飯田泰啓，
小西淳二（京大　核）

甲状腺にGa-67が集積する疾患は未分化癌，悪性リンパ腫，橋本病，亜急性甲状腺炎などが知られている．しかし分化型甲状腺癌や良性の結節性病変にGa-67が集積したという報告は極めてまれである．私達は甲状腺腫にGa-67の著明な集積を示した興味ある2例を経験したので報告する．症例1は72才女性．びまん性甲状腺腫を触知した．甲状腺全摘術を行ったところ，左葉は乳頭腺癌の組織で占められており，右葉は腺腫様甲状腺腫であった．症例2は71才男性．甲状腺超音波像で多結節性病変が描出されたため，腺腫様甲状腺腫が示唆されたが，手術によりHürthle cell tumorが証明された．Ga-67は同部に一致して集積が認められた．

264 IRMA法による血中サイログロブリン濃度測定の基礎的および臨床的検討

○太田圭子、才木康彦、中西昌子、野沢浩子、川井順一
今村摂、富永悦二、山口晴司、伊藤秀臣、日野恵
池窪勝治（神戸市立中央市民病院核医学科）服部尚樹
石原隆、倉八博之（同　内分泌内科）

Tg-Ab陽性血清においてもTgが測定できることを目的として開発されたキット（第一RI）につき基礎的検討を行ない、臨床応用を試みた。本法は簡便な試験管固相法であり、血清100μlを使用し、室温20時間のインキュベートで0～500ng/mlの測定が可能である。精度、再現性、希釈試験はいずれも良好であった。Tg-Ab陽性血清のTg値は、抗体価が低いものではその影響は受けず、高抗体価になるにつれ低値になった。健常者の血中Tg値は平均15.5±8.7(SD) ng/mlであった。甲状腺腫瘍では高値を示すものが多く、その診断や治療効果の判定に有用であった。

265 自己抗体の影響の少ないＩＲＭＡ法サイログロブリン測定キットの検討

御前　隆、高坂唯子、笠木寛治、竹内　亮、宮本信一、
小西淳二（京大　放射線部、核医学科）

従来のサイログロブリン測定法では患者血中に自己抗体が共存した場合に正確な値が出ないという問題があった。この度自己抗体と交差の少ない２種類の単クローン性抗体を利用したキットが開発されたので基礎的検討を行なった。抗体陰性の検体についての再現性・回収率・希釈曲線は満足すべきものであり、測定値は既存の他のキットのものとよく一致した。抗体強陽性の血清から精製したIgGを抗体陰性の検体に高濃度添加した実験では測定値が非添加時よりも低く出る傾向がみられた。しかし抗体強陽性の血清検体の測定値は希釈により大きな変動を示さなかったことから、臨床検体の測定の際の自己抗体の影響は小さいものと思われる。

266 甲状腺ホルモン自己抗体例におけるＩＭＸ－Free T4, Free T3の経時的変化

森田新二*、玉井　一**、渡瀬まゆみ*、深田修司*、
松塚文夫*、森川正道*、松林　直**、隈　寛二*
隈 病院*　九大心療内科**

甲状腺ホルモン抗体が存在すれば、T4誘導体を用いた1 step RIA法で遊離型ホルモンを測定した場合、自己抗体が測定系に直接干渉するため、測定値が必ずしも甲状腺機能を反映するとは限らない。

今回、2 step MEIA 法を用いて、甲状腺ホルモン自己抗体を有するバセドウ病８例、橋本病２例、甲状腺腫瘍２例の計１２例を対象に経時的に遊離型ホルモンを測定し検討した。ＩＭＸアナライザーを用いた 2 step法による遊離型ホルモン値はＴＳＨと負の相関を示し、臨床像を十分に反映した。本法は甲状腺ホルモン自己抗体例では極めて有用な遊離型ホルモン測定法と考えられた。

267 ラジオレセプターアッセイによるTSHレセプター抗体の測定—バイオコード社キットの使用経験

竹内　亮，高坂唯子，笠木寛治，宮本信一，御前　隆，
小西淳二（京大　核）

TSHラジオレセプターアッセイによるTSH結合阻害抗体(TBII)の測定は自己免疫性甲状腺疾患の臨床に広く応用されている．最近私達はバイオコード社の開発したTBII測定用キットを使用する機会を得たので，その成績を報告する．活性はI-125標識ウシTSHの可溶性ブタ甲状腺細胞膜への結合阻害度で表した．弱陽性，中等度陽性および強陽性を示した３検体の測定値のアッセイ内における変動係数はそれぞれ9.4，3.1および2.0%，アッセイ間における変動係数はそれぞれ9.2，6.3および9.9%であった．未治療バセドウ病患者における活性は4.3～86.3%に分布し，47例中45例(95.1%)が正常値上限（13.7%）以上の値を示した．今後の臨床応用が期待される．

Presented by Medical*Online